

心の声

小児看護実習にて、私は4歳のAちゃんとお会った。コロナ禍のため、両親と会える時間は1日30分と限られていたが、両親も欠かさず来院されていた。Aちゃんは、一日の大半を小さなベッドの中で過ごしていたが、両親に話したいことは山の様にあり、面会中、話の途切れることはなかった。そんなAちゃんだが、面会終了時には、泣くこともなく、驚くほど聞き分けよく、両親の帰りを見送っていた。しかし、いつも自身の支えとなる人が傍にいないことから、自発的に思いを伝えることが難しく、日中は涙が出るまでトイレを我慢してしまったり、指しゃぶりをしながら、午睡する様子も見られた。自身が病院にいる理由も、知らない場所で1人過ごさなくてはならないことも、4歳なり理解してはいるが、大きな声で誰かを呼ぶのも、トイレを訴えることも恥ずかしく、漠然とした、形容できない寂しさ、孤独を感じているのではと思った。私は、Aちゃんが発信し易いよう、こちらから働きかけていかななくてはならないと思い、援助の前後などにトイレの有無や、何をしたいかを尋ねるようにした。そして毎回、教えてくれて嬉しい、ありがとう、と伝えるようにした。Aちゃんはベッドまで戻る際スキップのように軽く跳ねながら歩いたり、ベッドの中でも想像力豊かに遊びを展開させて過ごしていた。また、Aちゃんは絵が上手で、色鉛筆で「オレンジはみかん、ピンクはもも」と話しながら絵を描いていた。赤はりんご、などの言葉が続くかと考えていたところ「赤は血！」と話した。直前に、持続点滴を留置した手背から逆血があり、Aちゃんはそれを声もなく、全身を固く静止させ、じっと見つめていたのである。日々検査の痛みや恐怖に耐え、こうして人知れず、入院生活での思いを心に刻んでいっているのかと考えた。あらためて、Aちゃんが注射の際、泣きも動きもせずにごすごかったということ伝えた。入院生活が、その後の成長において、心の傷となつてはいけない、Aちゃんが頑張っていることを言葉にして共感し、今の経験が、Aちゃん自身の力となり、支えとなるようにしなくてはと考えた。2日間の実習はあっというまに終わってしまった。最後の挨拶の際「なんでもう来ないの？」というAちゃんに、私は「家」に帰るから、とは言えなかった。うつむいて絵をくれたのと同時に、言葉にならない思いを受け取ったような気がしたからだ。心身の回復を助け、妨げとなるものを退け、少しでも早く、この子たちが大好きな家へ、日常生活へ、帰れるようにすることが、これからの私の役目なのだと思う。

日々多忙な業務に追われる現場であっても、この気持ちはいつも忘れずにいたい。子ども達と同じ目線に立ち、心に描く退院後の生活を共に想像し続けること、笑って帰っていく姿を見届けることが、心に寄り添う看護であると考え。